
名犬駄犬

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

名犬駄犬

【Nコード】

N9028A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

自慢の犬を飼っているデザイナー中尾真美子。息子の一樹がもらってきた犬を見てその情けない姿に愕然とする。つつい可愛がっている名犬と比較して邪険にしていたがそれを息子に気付かれてしまいそれを批判される。愕然とする真美子はどうするのか。

第一章

名犬駄犬

中尾真美子の自慢は血統書付の愛犬だった。黒いシベリアンハスキーのソーニヤを彼女はいたく自慢していた。

ソーニヤは雌犬である。ハスキーらしく身体は大きく、右目は青、左目は黒とハスキーにはよくあるフェアリーアイズであった。その為顔も非常によかったし、毛並みも整っていた。

それだけでなく主思いで頭も非常によかった。一匹で買い物に行くことができるし、まだ小学生の自分の子供一樹の遊び相手をしてくれたりもする。本当に自慢の可愛い犬であった。

「ソーニヤはもうペットなんかじゃないわ」

彼女は心からそう言っていた。

「家族なのよ。そして私の親友なの」

本当にそう思っていた。彼女はソーニヤを信頼していたし、愛していた。ソーニヤより賢くて優しくて美しい犬は他にはいないとさえ思っていた。

家にはソーニヤさえいれば充分だと思っていた。ところがここで思わぬ来訪者がやって来た。

「ねえお母さん」

ある日その我が子である一樹が上目遣いに彼女に話し掛けてきたのである。

「何？」

真美子はそれを受けて一樹を見た。真美子は実はあまり背が大きいのではない。小学生の一樹を見下ろすその顔も彼とあまり離れてはいない。あと二年か三年もすれば追い抜かれる背だった。

だが今はまだ我が子よりは大きい。そして見下ろしていた。

「もう一匹、犬飼っていいかな」

「犬!？」

真美子はそれを聞いて思わず声をあげた。

「うん。友達の犬がね、子供産んで」

一樹は母を見上げてもしもじしながら言う。

「それで貰ってくれる家を探してるんだ。一匹ずつ」

「それでお母さんに言ってきたのね」

「うん」

一樹はそこまで言うところりと頷いた。

「で、うちはどうか、って」

「うちにはソーニヤがいるじゃない」

真美子はまずはこう言った。

「あんな素晴らしい犬他にはいないわよ」

「それはわかってるけど」

実はもう一匹買う余裕はある。夫は作家でありそれなりに売れている。真美子自身もイラストレーターとしてそこそこ地位を得ている。だから経済的な余裕はあるのだ。

「それでも飼いたいのか？」

「うん」

一樹はまた頷いた。

「お母さんがよかつたらだけ」

家のことは真美子が全部取り仕切っている。夫のことも一樹のことも全てだ。まあこれはどの家の妻も母親も同じであるが。女は家庭と子供を持ったその時に絶対者となるのだ。そういう人もいる。

「駄目だったらいけど」

（随分弱気なのね）

真美子はもじもじする一樹を見て心の中で呟いた。

別に咎める気も意地悪なことを言う気もない。だが息子のそんな態度がどうも気に入らなかった。

「一樹」

彼女は息子の名を呼んだ。

「う、うん」

息子はそれに対してやはりもぞもじ、いやおどおどした声で返してきた。

「お母さんが駄目って言ったらどうするの？」

「まずはこう尋ねた。」

「それは……」

その言葉に対して一樹はやはりおどおどしたものであった。

「素直に諦めるの？ どうなの？」

「真美子は問うた。」

「どうなの？ 言いなさい」

「飼いたい」

一樹は俯いて言った。

「飼いたいの？」

「うん」

そしてこくりと頷いた。

「飼いたいけれど」

「一樹は飼いたっていうのね」

「うん」

「わかったわ」

「真美子はここでこう言った。」

「それじゃあいいわ」

「えっ!？」

「ただし」

顔をあげた一樹に対して言う。

「ちゃんと世話はすること。いいわね」

「うん」

一樹の声は明るなものになっていた。見ればその顔も実に明るくなっていた。それを見れば彼が本当に犬をもう一匹飼いたいのがわかった。だが真美子は心の中で思っていた。

（ソーニャよりいい犬がいるかしら）

彼女にとってはソーニャ以外の犬はどうも考えられなかった。自

分でも言っているがソーニヤはもう只の飼い犬ではない。家族なのだ。そのかけがえのない家族以上の犬かどうか考えていたのだ。

「で、そのわんちゃんは何時おうちに来るの？」

「一週間後」

一樹は答えた。

「落ち着いてから渡してくれらしいから。それまでに小屋とか用意しておくよ」

「種類は何？」

「雑種」

「雑種」

それを聞いた真美子の顔が一瞬暗くなった。

「雑種なの」

「そうだけど。何か悪いの？」

「いえ、別に」

まさか自分の子供の前で血筋がどうか言うわけにもいかなかった。それが教育に悪いのは彼女も承知していた。例え犬であってもだ。彼女もそれはわきまえていた。

「悪くはないわ」

「じゃあいいんだよね」

「お母さんに二言はありません」

これも教育だ。そう簡単に自分の考えをあれこれと変えるものではない。これも真美子の教育方針であった。だがどうも一樹は優柔不断でおどおどしたところがあるのが不安だった。

「あまり大きくならないみたいだから」

「そうなの」

ソーニヤはシベリアンハスキーだからかなり大きくなる。それを考えるとあまり大きくならないのは助かると言えば助かる。それに子供の一樹も世話がし易いだろうと思った。

「じゃあ一週間後に連れて来るね」

「ええ、わかったわ」

夫に伝えると彼も悪い顔をしなかった。これでもう一匹犬が家にやって来ることになった。

その一週間が経った。一樹がその犬を連れて来た。

「・・・・・・・・・・」

真美子はその犬を見てまずは沈黙してしまった。

「ねえ一樹」

「何？」

「そのわんちゃんよね」

「うん、そうだけど」

彼はにこにこした顔でその手に子犬を抱いていた。

見ればその子犬はこげ茶色で黒いぶちがあつた。そして小さく、毛並みも何かよくない。それに目も小さく耳も小さい。鼻も顔立ちも何処となく不恰好でソーニヤとは似ても似つかない外見だった。

そして舌を出してへっへっ、と息をしている。とても賢そうには見えなかった。

「可愛いよね」

「ええ、まあ」

一応受け答えはするがそうは思えなかった。どう見ても不細工だった。

「あの、一樹」

「何、お母さん」

「そのわんちゃんよね」

もう一度問うた。ソーニヤと比べるとあまりにも不細工だからだ。

「そうだけど。駄目？」

「いえ、そんなことはないわ」

今更そんなことは言えない。それに一樹には人は容姿で判断するなど教えている。実際に彼女もそうではあるのだがこれは犬だ。やはり判断してしまう。

「それじゃあ小屋に入れとくね」

「え、ええ」

一樹は喜んでその犬を小屋に入れた。もう買って家に置いておいたのだ。

「すぐに首輪をつけて鎖をする。これでもう完全に家の犬になった。真美子はそれを少し戸惑いながら見ていた。だがもう言ってしまったからには仕方ない。これで決まっちゃってしまっていた。

「お母さん」

一樹は鎖までつけ終わると真美子に声をかけてきた。

「何か？」

「名前。どうするの？」

「あつ、名前ね」

言われてようやく気付いた。

「そうよね。やっぱり名前がないとね」

雑種でも何でも名前が必要だ。この子犬もそれは同じなのだ。

「何にしようかしら」

「コロなんてどうかな」

「コロ」

「うん、こいつ小さくてコロコロしてるから」

一樹はコロを撫でながら言っている。

「丁度いい名前だと思っただけねど」

「コロねえ」

だが真美子はその名前が気に入らなかった。

やはりソーニヤを思い出してしまふ。折角ロシアの有名な作家の小説のヒロインからとったというのに。それと比べるとコロなどという名前は実にちっぽけで格好の悪い名前に思えたのだ。

「何か」

「嫌なの？」

一樹はそれを聞いてまた問うてきた。

「コロって名前です。駄目かなあ」

「そうじゃないけれど」

真美子には真美子の好みがあるのだ。コロなどという名前は気に

入らないのだ。

「もうちよつと」

「これでいいと思うけれど」

「でもね」

そうは言ってもどうにもいい名前が思いつかない。

「じゃあお母さん考えてよ」

「うっ」

案の定息子に下駄を預けられた。困ったことになったと思った。

「他にいい名前をさ」

「そう言われても」

咄嗟に言われても考えつかない。

「ウラジミールなんてどうかしら」

「嫌だよ、そんなの」

一樹は顔と声でそれを拒んだ。

「それじゃあイワン」

「馬鹿になりそうな名前だね」

イワンの馬鹿は一樹も名前だけ知っているのだ。だからこう断られたのだ。

「そんな名前嫌だよ、僕は」

「けれど」

「やっぱりコロでいいじゃない」

どうやら一樹はその名前が気に入ったようであった。

「呼び易いしさ。それでいいと思うけれど」

「それでいいのね」

「うん」

その明るい声と笑顔に負けた。息子にそんな顔をされるととても嫌とは言えないのが母親だ。

仕方ないと言えば仕方ないがここは一樹の意見を尊重することにした。その名前で落ち着くことにしたのだ。

「それじゃあそのわんちゃんの名前は決まったわね」

「よかったな、コロ」

一樹はコロと名付けられたその子犬を抱いて嬉しそうな笑顔をかべていた。こうしてコロは真美子達の新しい家族となったのであった。

第二章

世話は一樹が主にやることになった。だがやはり子供なので真美子もかなり世話をした。ところが。

コロはソーニヤとは似ても似つかないどん臭い犬だった。何をするにも遅く、へまばかりするのだ。

「また食器ひっくり返して」

食べる時もそうだった。不器用なのでドッグフードや水を入れている食器をすぐにひっくり返してしまうのだ。

トイレも。しょっちゅうそこいらでする。

「こらっ」

怒るとシュンとした様子になる。けれど同じ失敗を何度もする。

買物なぞ出来る筈もない。弱虫でそのうえ身体も小さく番犬にもならない。一樹の遊び相手どころか遊ばれている始末だ。とてもソーニヤとは比べ物にならない。

「貴方って本当に駄目ね」

ある日真美子は小屋の中で小さくうずくまっているコロに対して言った。

「ちよつとはソーニヤを見習いなさい。愚図なんだから」

そんなことを言われてコロはやはりシュンとしている。しかしそれでもそのどん臭さは変わりはない。相変わらず失敗ばかりしていた。

真美子はついついソーニヤと比べてしまう。だが一樹はそうでもなかった。

「じゃあ行って来るね」

「ええ、気をつけてね」

散歩に行く時も一緒だ。一樹はコロを可愛がっていたのだ。そんな息子の様子が少し信じられなかった。

「どうしてかしら」

真美子は思った。

「あんな愚図な犬、何処がいいのかしら」

そう思う。外見も不細工だ。いいところなぞ何も無いように見える。やはりソーニヤと比べると完全に駄犬と言っていていい。しかし一樹はそんなコロを可愛がっているのだ。

一樹はいつもコロと一緒にいた。ソーニヤも一緒にいるがコロとはもつと親密だった。

「ねえ一樹」

部屋の中でテーブルに座り向かい合っておやつを食べている時に尋ねた。夫はこの時書斎に籠もって仕事をしていて二人だった。

「何、お母さん」

一樹はケーキを食べるその手を止めて母親に顔を向けてきた。

「最近貴方いつもコロと一緒にいるわね」

「うん」

何も考えることなく返事を返してきた。

「そうだけれど。それがどうかしたの？」

「別に」

何か言うのが気まずく感じた。

「ただね」

「ただ、何？」

それでも言おうとする。だが一樹は母が何を言いたいのかわかってはいなかった。

「コロとソーニヤ。どちらがいいの、貴方は」

「どっちかって言われても」

一樹はやはり迷いも何もなかった。

「僕はどっちとも言えないよ」

「そうなの」

「お母さんは違っの？」

「えっ!？」

逆に息子に言われて少し戸惑いを感じた。

「お母さんはコロのことは嫌いななの？」

「そ、それは」

一瞬何と言っているのかわからなかった。

「嫌いじゃないよね。飼うの賛成してくれたし」

「え、ええ」

何とか感情を表に出さずに応えた。

「コロって可愛いでしょ」

「まあね」

実はとてもそうは思えない。不細工な顔だと今でも思っている。

「それにね。優しいんだよ」

「優しい!？」

「そうだよ。だって散歩してる時ね」

「ええ」

「お花を見たら立ち止まってじっと見ているんだよ。虫とかは絶対に虐めないし」

「そうなの」

ソーニヤも虫を虐めたりはしないがこれはそもそもソーニヤが非常にできた犬だからである。これは驚かなかった。

しかし花を好きな犬というのは。かなり意外だった。

「道に咲いているお花見たらいつもじっと見ているんだ。お母さんも見てみるといいよ」

「ええ、わかったわ」

軽い返事だった。だがどうにも信じられない。しかし一樹がコロを好きなのはわかった。どうやら自分とは好みが違うようだと思うただけだったが。

「ねえコロ」

真美子はその話の後にコロに餌をやりに行った。餌自体はソーニヤと同じものだがコロは身体が小さいのでその量はあまり多くはない。

「貴方、お花が好きなのね」

だがそれには応えはしない。餌を見て目を輝かせているだけである。

「それと餌かしら」

やはりそれを思うとつまらない犬に思える。

餌を食べているコロはガツガツしていてあまり品がないように思えた。それに対してソーニヤは上品に食べる。やはりソーニヤと比べて見てしまう。そして駄目な犬だと思った。

「後で散歩行く？」

それを聞くとソーニヤは耳をピンと立てるものだがコロにはそれはない。ただ餌をガツガツと食べるだけであった。

「まあいいわ。行くわよ」

それに構わずにこう言った。餌を食べ終わったのを見てソーニヤと一緒に散歩に連れて行くのであった。

散歩に連れて行くとやはり遅い。大きさの関係もあるがソーニヤがスタスタと歩くのに対してコロのそれはトコトコといった感じである。それにあちこちで用をたす。その度に立ち止まってしまう。

「またなの？」

また用をたすコロに呆れてしまった。今は電柱に用をたしている。その前は橋に。しょっちゅう用をたしているのだ。

「本当に。歩くのは遅いし」

やはりコロが嫌になる。ソーニヤと比べて劣っているようにしか見えない。

「一樹も。こんな犬の何処がいいのかしら」

「あ、ほら見て」

そこへ女学生達を通る。

「シベリアンハスキーよ」

「何か格好いいわよね」

ソーニヤのことだとすぐにわかった。それを聞いて思わず心の中で勝ち誇る。

「すっごく賢そうだし」

「目の色も左右で違うし。綺麗よね」
女学生達の声が心地よい。それが彼女にとって何よりの誇りだった。

だがコロに対しては。そうではなかった。

「あれ、あの犬」

女学生達もコロに気付いた。

「何か情けない顔してるわよね」

「そうね。間抜けな顔してるわね」

(間抜け……)

さつきとは全く別の感情を抱いた。彼女達の口さがない言葉に真美子是不愉快なものを感じた。

そしてそれは女学生達には向けられなかった。言われているコロに向けられたのである。

「だっさいわよね」

「そうよね。不細工だし鈍そうだし」

「人間だったら何か付き合いたくないよね」

「そうよね。あんな鈍そうだと」

そんなことを言いながら去って行った。真美子はその後でコロを不機嫌そのものの顔で見下ろして言った。

「コロ」

コロは何もわからない。ただ真美子を見上げるばかりである。

「あんなこと言われて。本当に貴方は駄目ね」

悪いことを言われているのはわかる。するとシユンとしよげかえった。

「全く。ノロマだし不細工だし。何もいいところがないのね」

そう言いながらコロを見下ろす。

「少しはソーニヤを見習いなさい。そんなのだから駄目なのよ」

ソーニヤは特にコロを見たりはしていない。意に閑せずといったところだった。

だが真美子は違っていた。とにかくコロが言われたことをそのま

ま自分のものとして受け止めていたのだ。だからコロが許せなかったのだ。

「一樹が気に入ってるからいいけど。しっかりしなさい」

しよげかえって座ったまま聞いている。如何にも申し訳なさそうだ。

だが結局コロはコロなのだ。不細工で動きも遅い。それがわかっているから真美子は余計にイライラしていたのだ。どうしようもないことこそそうしたイライラが募るものなのだ。

情けなくなる。自分のことではないのに。それでもコロは変わりはない。鈍く、小さく、そして不細工なままだ。いい加減嫌にさえなる。

だがそれでもこの犬を邪険にするわけにはいかなかった。一樹が気に入っているし、その一樹の教育の為だ。ここは我慢するしかなかった。

一樹は相変わらずコロを可愛がっている。ソーニヤに対するそれとは態度が全然違っていった。そう、まるで友人の様であった。それに気付いた真美子はまた一樹に尋ねた。今度はコロの小屋の前だった。そこで話をした。コロは一樹の足元でゆっくりと寝ていた。のどかなものだった。

「コロといつも一緒にいるわね」

同じ質問だった。

「だって凄く優しい犬だもの」

「そうなの」

やはり返事も同じようなものだった。真美子は心の中で溜息をついた。こんな犬の何処がいいのかと。

「お母さんはわからないの？コロのよさが」

「それは」

「僕、わかってるんだ」

一樹は顔を暗くさせた。目も母親である真美子を咎める目であった。

「お母さん、コロ嫌いでしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

反論出来なかった。その通りだったからだ。はじめて息子に対して何も言えなくなった。

「いつもソーニヤばかり見てるからわかるんだ。コロのことちつとも見ていないから」

「そうじゃないけれど」

「そうじゃなかったら馬鹿にした目で見てる。お母さんはコロなんかどうだっていいんだ。いや、いなくなってしまう方がいいと思ってるんだ」

「それは・・・・・・・・」

言い返せない。息子に。こんなことを言われたのは夫にすらなかった。

「だからコロのよさがわからないんだ。コロはコロなんだよ」

「一樹・・・・・・・・」

「ソーニヤとは違うんだよ。お母さんはそれがわかっていないんだ」
「それはわかっていているけれど」

俯いてしまった。わかつてはいるつもりだが。

「ソーニヤと違うのはわかつているわ」

「じゃあ比べてるんだ」

一樹はまた母に対して言った。

「だからコロを嫌うんだよ。お母さんはコロのことわかってるつもりじゃないんだ」

「そんなことはないけれど」

しかしその言葉は弱かった。

「あのね、一樹」

「いいよ、言い訳なんか」

息子の方が先に言った。

「コロのこと何もわかっていないのに。お母さんは間違ってるよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり何も言えなかった。息子の言葉がここまで堪えたのもはじめてだった。

第三章

「もういいよ。コロは僕が面倒を見るから」

そう言っただけで寝ていたコロを抱き寄せる。そして顔を近づけさせた。

「僕がいるからな、コロ。安心していいよ」

彼はコロに優しい言葉をかけた。

「お母さんに何を言われても気にしちや駄目だよ。御前には僕がいるからな」

「けれど一樹」

「もういいよ、本当に」

また息子に突き放されてしまった。

「コロのことはもういいよ。僕が面倒をみるから。お母さんだって嫌いな犬と一緒にいたくなんかないでしょ!？」

完全に俯いてしまった。何も言えない。

「それじゃあね。今から散歩に行つて来るよ」

そのままコロを連れて散歩に行つてしまった。そして後には俯いたままの真美子だけが残った。

非常に後味の悪い気持ちだった。息子にそんなことを言われたのは。自分が教えていく筈の息子に見抜かれていた。自分が気付いていなかったことまで。

コロの小屋を見る。そこにはもうコロはいない。今一樹と一緒に外に出てしまった。

自分は一人になったように感じた。今までの自分が崩れ去つたように思えた。人間としても、親としても。彼女は全てを失つたように思えた。

ソーニヤの方へ足を向ける。だが彼女はその時寝ていた。

「ねえソーニヤ」

それでも誰かに話さずにはいられなかった。だから彼女に声をかけた。

「私、間違ってるのかしら」

しかし返事はなかった。ソーニヤは寝たままであった。

「一樹にあんなこと言われるなんて。悪い母親よね」

そう言ったところで顔を上げてきた。そして真美子を見上げた。

ソーニヤは何も言わない。ただ真美子の顔を見上げているだけである。しかし彼女はそこ左右で色の違う目に何かを見たような気がした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は何かを思った。そして家の中に入った。やりきれない心をそのままに。それでも何かを感じていた。その何かをどうかしたいと思った。

次の日だった。一樹は一言も口を聞こうとしない。怒ったままであった。真美子も何も言うことは出来なかった。一樹が学校に行くと彼女は家を出た。

「あれ、何処に行くんだい？」

夫である賢一が声をかけてきた。丁度お茶を飲み部屋を出たところだったのだ。

「買い物か？」

「ううん、違うわ」

真美子は夫の問いに答えた。

「ちよつと犬の散歩にね」

「こんな時間にか？」

彼はそれを聞いて怪訝そうな声をあげた。

「まだ早いだろうに」

普段は夕方に行くのが真美子の散歩の時間であった。だが今日は違っていた。どういうわけか朝に行きたいと言っているのである。

賢一はそれに今一つ釈然としないものを感じていたのだ。

「ちよつと気分転換にね」

「仕事が詰まっているのか？」

「ええ」

実は違っただがここはこう答えた。

「ちよつと」

「そうか。まあそういう時は散歩で頭の中を切り替えるのがいいよな」

「そうでしょ？だから」

「じゃあ行つて来ればいいさ。ついでに買い物でも行つて来たらどうだい？」

「今日の献立？」

「まだ決めてないんだろ？だったらついでにと思つてね」

「そうね、そうしようかしら」

何となくそう返した。そこまでは考えてはいなかったのだ。

「留守番は僕がしておくから。ついでにお昼も」

「ビールは夜にね」

「わかつてるつて」

実は賢一はビール好きだ。少し暇があるとすぐに飲むとする。真美子は健康上の理由と一樹への影響を考えて賢一に昼にはビールを飲まないように頼んでいたのだ。

こうして買い物も兼ねて散歩に出掛けることになった。まずはその前に犬小屋に向かった。

ソーニヤを連れて行つた。コロも。昨日の一樹の言葉が気になつて仕方がなかったのだ。

「一緒に行く？」

コロに声をかける。見れば嬉しそうに尻尾を振っている。どうやら散歩に行くのが本当に嬉しいようである。

こんなに馬鹿にしている自分に。そう思うといたたまれない。しかしここはそれを押さえて彼も散歩に連れて行くことにしたのである。目的は一つであった。

「本当かしら」

コロのいいところ。それを見たかったのである。

あの時一樹は自分を責めた。コロのことが何もわかっていないと。

そしてコロとソーニヤを比べて区別していると。その言葉がずっと耳に残っていたのである。

(それなら)

真美子は心の中で呟いた。

コロのいいところを見たい。そして自分が間違っているかどうか確かめたい。彼女はその為にコロを散歩へと連れて行くのであった。多分に自分の為であったが。

コロの首輪を紐に繋ぐ。そしてソーニヤも。二匹をそれぞれ連れて散歩に向かうのであった。

途中まではいつもと同じであった。相変わらずソーニヤは気品があり凜としているがコロは情けなく、トボトボとしか感じて歩いてきた。ここまでは本当に同じだった。

それでも真美子は違っていた。コロから目を離さない。今は彼の動きに注目していた。

買い物まではすぐに終わった。店の外にソーニヤとコロを繋いで買い物を済ませる。そして店を出た。その時に彼女は最初のものを見たのであった。

「えっ……」

コロである。そこにはコロがいたのだ。

彼はソーニヤと一緒にいた。だが違うことをしていたのだ。

道にあったタンポポを眺めていたのだ。ただ、のどかに眺めていた。

「コロ……」

ソーニヤはいつも通り真美子を待っているだけだった。きちんと座って待っている。それだけだ。

しかしコロは違っていた。花を楽しそうに見ていた。それを見て真美子は一樹の言葉を思い出した。

「そう、そうだったのね」

見ると不思議に心が穏やかになった。コロはたんぽぽの上にカナブンが来ても追い払ったりはしない。そのカナブンまでも優しい顔

で眺めているだけであつた。

コロのその姿を見て真美子も優しい気持ちになつた。彼女もそれに合わせて花を見る。不思議な程穏やかで優しい朝の散歩であつた。

それから彼女はコロにも普通に接するようになった。ソーニヤはソーニヤ、コロはコロとしてそれぞれ公平に、そして大切な家族として扱うようになった。一樹にもそれはわかり、二人の仲も元に戻つた。

第四章

「なあ」

ある日のお昼のことだった。昼食を終えた真美子に賢一が声をかけてきた。

「何かしら」

「いや、最近御前な」

「ええ」

彼は妻の顔を見て言う。

「優しい感じになったな」

「そうかしら」

「ああ、何処となくな。コロが家に来て暫くしてからかな」

「少しね」

その理由は彼女が一番よくわかっていた。

「コロを見てると。そうだったの」

「御前最初はコロ嫌いだったのにな」

「わかってたの？」

「そりゃわかるさ。あそこまで露骨だと」

「そうだったの」

夫にも息子と同じようなことを言われまた顔を伏せてしまった。

「確かにソーニヤとは全然違うからな」

「ええ」

「ソーニヤは素晴らしい犬さ、本当に」

これは彼もわかっていた。

「けれどな。コロもソーニヤと同じ位素晴らしい犬なんだよ」

「そうね。それがずっとわからなかったわ」

自分がどれだけ馬鹿で視野が狭いのかよくわかった。

「コロはな、優しいんだ」

「そうね」

「他のどんな犬よりもな。心が優しいんだ」

「それにずっと気付かなかったわ」

「けれど今は違うよな」

「そうね」

その言葉にゆっくりと頷いた。

「本当に。変わったわ」

「コロのおかげか」

「ええ。ソーニヤとはまた違った素晴らしい子だってわかったから」

「そのソーニヤだって本当は色々もあるんだ」

「えっ!？」

「その名前だよ」

賢一は妻に対して言った。

「名前って?」

実はソーニヤの名付け親は真美子ではないのだ。賢一だ。彼が名付けた名前なのである。

「ソーニヤって何の名前だ?」

「確か小説のヒロインだったかしら」

「そう、ドストエフスキーの小説のな」

罪と罰のヒロインである。殺人への偏執とその後の罪への意識に囚われる青年ラスコーリニコフを救う少女である。実は彼女は娼婦だ。その時の暗い帝政ロシアを舞台とするに相応しい立場のヒロインであった。汚れているとされる立場にありながらその心は清らかだったのである。これは小デュマが書き、ヴェルデイがオペラにした椿姫においても同じである。人は決して仕事で汚れるのではなく、心が問題だということなのである。

「あの名前を付けたのは。正解だったな」

「名前だけじゃないってこと?」

「そうさ」

賢一は言う。

「ソーニヤって名前はね」

「ソーニヤは確かにいい子だけれど。名前には意味があったのね」

「御前は気付かなかったみたいだね」

「罪と罰は知ってたけれどね」

それ位は真美子も知らないわけではなかった。イラストレーターとしての仕事の中には小説の挿絵も多い。だからそこで知ったのである。

「ソーニヤは娼婦だったけれど心は清らかだった」

「そしてその名前を持つソーニヤは立派な犬だったと」

「そういうことだよ。それがわかってくれたみたいだね」

「今になってやっとね」

「そしてコロも」

「ソーニヤとは違うけれど。素晴らしい犬だってことね」

「ソーニヤはソーニヤ、コロはコロだね」

「あなたはコロには気付いていたの？」

「まあね」

うっすらと笑って答えた。

「ちゃんとね。わかっていたよ」

「そうだったの。それじゃあわかっていなかったのは」

「まあそう気にすることはないよ」

落ち込もうとする妻を慰める。

「気付いたんだから」

「有り難う」

「確かに鈍くて外見も綺麗じゃないし小さいし。そんな犬だけれどね」

だがコロには他の犬よりもずっといいものがあるのだ。他の犬にはない素晴らしいものがあるのだ。

「優しい。気のいい犬なんだ」

「そうね」

「そんなコロだから一樹も気に入ったんだろうね。ほら、ソーニヤは一樹と遊ぶ時一樹に合わせてるって感じだろ？」

「そついえばそつね」

これも言われてみてようやく気付いたことであった。迂闊と言えば迂闊かも知れない。母親として真美子は自分の至らなさに恥じる気持ちを感じた。

「けれどコロは違うんだ」

「コロは。一樹と一緒にってるのかしら」

「そつなんだ。一樹と一緒に楽しんで、一樹と一緒に悲しんで。一樹とコロはいつも一緒なんだ」

「そつ。だから一樹はコロが好きだったの」

「それもわかってくれたみたいだな」

「今やつとね」

それまでわからなかった。いや、わかつともしなかったと言わべきだろうか。コロのそうしたところに。ソーニヤと比べてばかりでコロのことには気付かなかったのだ。気付こつともしなかったのだ。

「私、やつとコロのことがわかつたわ」

「ソーニヤとは比べられないだろう？」

「ええ」

そのつえで頷く。

「全然違うのね」

「そつさ。ソーニヤだつてその名前とは違つてゐるし」

「コロもソーニヤとは全然違う」

「けれどいい犬なんだ」

真美子に言い聞かせた形になった。

「コロはコロで」

「ソーニヤはソーニヤで」

「そついうことさ。ソーニヤは名犬だよ、確かに」

これは否定のしようがない。

「コロは駄犬かも知れない、けれど」

「素晴らしい犬なのね」

「そう、名犬でも駄犬でも素晴らしい犬だっただけには変わりはないんだ」

賢一の顔が明るくなっていた。

「ソーニヤもコロも」

「いい犬なんだよ」

「ええ」

それが本当にやっとわかってきた。真美子は晴れやかな顔で窓の方を見る。

コロが笑っていた。にこやかな顔で真美子を見詰めていた。

真美子もそれに微笑み返す。そこには侮蔑も何もなかった。そのままの笑みであった。

名犬駄犬 完

2006・5・26

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9028a/>

名犬駄犬

2008年11月7日09時20分発行